

新春対談

— アジアスケッチ —



国際保健通信編集人

高山義浩

広島市医師会会長

碓井静照

- 高山義浩(たかやま よしひろ) 1970年、福岡県生まれ。33歳。東京大学医学部保健学科，山口大学医学部医学科卒。現在，九州大学病院にて内科医として勤務するかたわら，インターネットマガジン『国際保健通信』の編集人として執筆活動を進めている。1992年に内戦直後のカンボジアを訪れて以来，43ヶ国にわたりアジアを放浪。その間，カンボジアやネパールなどで国際協力に参加したり，アジアとの交流プログラムを手がけるなどしてきている。著書として『アジアスケッチ ～目撃される文明・宗教・民族～』（白馬社）『国際保健医療というお仕事』（共著・南山堂）がある。

碓井 あけましておめでとうございます。

高山 おめでとうございます。

碓井 久しぶりですね。先生が、あちこちアジアの国を旅して、ユーゴスラヴィアに到着されたときに、一緒に食事をしましたね。

高山 本当に不思議なめぐり合わせでした。

碓井 すばらしい好青年だなと思ひまして、こんな人が世の中にいるのかなと思うぐらいでした。

高山 あのときは、本当に汚い格好をしていたので、驚かれたのではないかと感じておりました。

碓井 いやいや、あの当時、先生は東京大学を卒業されて、山口大学の学生さんでしたかね。

高山 はい。4年生でした。

1999 — 世紀末、何かを見ておきたいため放浪

碓井 半年間のアジア放浪を認めるという大学の方針は先生の恩師の方のアイデアですか。

高山 ええ。乾教授のご理解で。

碓井 すばらしいアイデアですね。学生たちにいろいろと見聞してきなさいという、その中で、先生はアジアを選ばれたのですね。

高山 そうですね。とにかくあの時代、1999年というのは、世紀末で、私の人生においても節目ですし、人類にとっても節目ですから、この節目の時期に何かを見ておきたい、何かを記録に残してみたいという気持ちがあったのです。

日本社会から学ぶべきことも多々あるとは感じていましたが、あまりに複雑すぎて、やはりこの21世紀の時代を目前にして何を見ようかと思ったときに、やはりアジアから中東へ、そして、東ヨーロッパへと、その道筋を自分の足でたどってみたいという気持ちが強かったのです。

碓井 ニーチェが、20世紀は戦争と動乱の世

紀だと言いましたけれども、21世紀は人類の英知を結集して、原理を確立して、戦争とか、核兵器の廃絶とか、あるいは貧困とか病苦とか、そんなものを克服するような、倫理の確立というふうに思ってきました。その節目に先生が、ちょうど問題が多いアジア地域をずっと旅してこられたので、その21世紀への見通しといますか、既に21世紀も3年たちましたけれども、21世紀に先生が何か感じられているものを、先生の著作の『アジアスケッチ』に書いておられるのですね。

高山 そうですね。やはり日本にいて、いろいろな直面している問題というのが隠されていることもありますけれども、そういう問題に対する解決策というのは、どうしても東京とかロンドンとか、ニューヨークとか、資本が蓄積しているようなところに解答を求めがちになっていますね。

ところが、人類が直面している問題、例えば食糧問題であれ、環境問題であれ、そういうものと見事に折り合いをつけて生きている人たちというのは、むしろアジアの中において、そういうところに出て行ってみると、たくさん問題がありますが、それ以上に、たくさん解決がある。その解決を拾っていく旅でもあったと思います。

碓井 99年の4月から、旅に出られて、まず最初にどこに行かれたのですか。

バンコク、インド

高山 最初はバンコクに入りまして、そこでエイズの問題を見てみたくて、エイズホスピスで活動しておりました。

碓井 私もバンコクに行ったことがあります。少女の売春、少女と言っても、本当に小さい、10歳ぐらいの、あるいはもっと若い人たちの売春の場所に行ってみたのですが、ち

ようどアメリカ人がやって来て、子どもたちが「私を買って」と言うわけですね。あの人がお客かなと思ったら、その人は、私たちがお客かと思って、互い同士が相手がお客かと思って写真を撮ろうとしていて、おかしかったけれども。裸足で、鼻をたらしたような子どもたちが、先生の言い方をしたら春をひさぐというようなことをしなくてはいけないような背景とか、それはひどいものだったでしょう。

高山 そうですね。アジアに限らず、各地、どこにでも売春というものはありますけれども、本当に貧しいだけの国はそんなに悲惨な形をとらないのですが。それがより悲惨な形をとってくるのは、貧しい状態から少し豊かさが見えてきた、そういう転換期にあるときに人権が蹂躪されて。その女性が売春してでも豊かになりたい、あるいは豊かになりたいために娘を売るとか、そういうようなことが出てくる。あのころのタイというのは、明らかにその転換期にあって、そういう中で、結局、農村ではじかれていった人たちが都心部にあふれていましたね。

碓井 この後、インドに行かれましたね。

高山 はい、インドは主に北インドを回ったのですけれども、一番メインとなっているのは、マザーテレサが設立した「死を待つ人の家」での活動でした。その活動自体は、確かに尊敬すべきものがあるし、すばらしかったのですけれども、ひとつ、国際協力の矛盾のようなものを感じる点もあります。というのは、大体100人ぐらいの行き倒れた人たちを収容して、手厚い看護をするのが「死を待つ人の家」なのです。ところが、実際のところ、あのカルカッタという町には、何千人、もしかすると万単位での行き倒れた人たちがいる中で、100人程度を拾ってきて支援をするというところには、ある種、デモンストレーション的なものがあるわけですね。

そういう意味で、国際協力というのは、果たして人を助けるのか、あるいは国を助けるのかということが難しくなりますね。確かに、彼女たちがやっていることはすばらしいことだし、これからも続いていってほしいと思いますけれども、ひとつの国とか、ひとつの町単位で国際協力ということを考えると、これはデモンストレーションでしかない。その思いというものが周りに広がっていくことができないと、国際協力というのは、本当の意味で成功したとは言えないのではないかと思います。

若い世代へのメッセージ

碓井 その本質をよく見定めて、それを広報する、あるいは、ボランティア活動の輪を広げると言いますか、そして、支援をする。支援の仕方もお金とか技術とか教育とかあるのでしょうけれども、ボランティア活動のどんなところに力を入れているのですか。

高山 私はまだ駆け出しですし、これからどのような活動ができるのかというのは、見通しがたっていないのですけれども、むしろ、私よりも若い世代の人たちに、今まで私がやってきた体験からメッセージを送るとすると、まず、国際協力から入ってほしくないのですよ。例えば、私はこういう活動をしていますから、たくさん学生さんから連絡が来るのです。インドのマザーテレサのところで活動したいとか、あるいは、タイのエイズホスピスで活動したいとか、そういう問い合わせがよくきますが、私は基本的にはすべてお断りの返事を書いているのです。それはめんどくさいからではないのです。

まず第一に、学生というのは、専門家ではありませんから、本当に役に立つ協力というのはできないと思うのですよ。情熱はあると

思いますけれども、本当に役に立つかというのは、それこそ先生のような専門性を得た方が、それまでの経験を生かして伝えていく、そういうところに国際協力の醍醐味があると思います。

では、どうすべきか。まず、その国の人たちと楽しく友達になってほしいのですね。例えばエイズホスピスであるとか、マザーのそういう「死を待つ人の家」であるとかは、その国の人たちにとってはそれは恥部で、見られたくないところなのです。そういうところから見に行くという姿勢自体が、もう既に援助の妄想が始まっているのです。

まず、その国に行き、その国の人たちが観てほしいというものを体験して、その国を好きにならないといけません。そうするうちに、そこの人たちとの友好関係の中から、この人たちはこういう問題も抱えている、友達として、そのことに対して何かしてあげたいという気持ちが高まったとき、初めて国際協力というのは始まると私は思うのです。

同様に、その国の人たちがどうなりたいたいのか、その人たちにとって幸せというのは一体どこなのか。日本のように高度な経済大国になりたいと思っているのか、あるいは農村で楽しく暮らしたい、そういうところに彼らの幸せのイメージがあるのか、そういうものをつかむことなしに、いきなりそこに入って援助を開始すると、自分たちの論理で展開してしまうのですね。

碓井 ユーゴスラヴィアで先生とお会いしましたとき、あのときはアメリカがベオグラードを爆撃しました。後で分かったけれども、あれが劣化ウラン爆弾だったのです。そこに行った最初のきっかけは、私がボストンにいたとき、ユーゴスラヴィアのベオグラード大学のその当時助教授、後に教授になりましたが、ニコラ・ステファノヴィッチという人と、一緒に遊んでいたのですね。町をぶらぶらし

たり、議論したりして。その後、ユーゴスラヴィアが戦渦に巻き込まれました。さらに国内の対立が強くなって、問題が大きくなったのです。そんなきっかけもあって、ベオグラードの援助のための視察をしたのです。援助といっても外務省の支援を受けて、医療支援をしたのですけれども。

やはりそういうふうな入り方が割とスムーズだったのは、今、先生から聞いてなるほどなと思いました。

高山 先生とベオグラードで、お会いしたときには本当にびっくりしました。先生のような方が、まさか戦場の傷跡が生々しいところに来られて、そして、何らかの支援というものを模索されているということは、今まで出会ったことがなかったので非常に感激いたしました。

私、一番長い活動はカンボジアでの国際協力活動なのですが、人が来ないで、物だけが送られてくるというのはよくあったのですよ。カンボジアの子どもたちに古着を送りましょうとか、ノートを送りましょうとか、そういうことでたくさんそういうものが集められて、そして、誰も来ないで船便でそれが送りつけられることが多い。

そういう中で、先生のような方が、まず現場に来て、本当に今からご自分がされようとしていることが、どういう意味があるのかというところを観られているという姿勢は、本当に国際協力の重要な方向だったと思いますよ。

碓井 私の別の場合の話ですが、1987年、いわゆる南部アフリカの飢餓の問題が起こったとき、初めBBC放送がこんなに困っていますよと報道したのです。日本からも森繁久弥さんなどが中心になって、毛布とか食糧とかを送ったのです。どのようになっているか見に行ったのですが、高山先生がおっしゃるようを送りっぱなしです。そこから陸送して行くトラックの費用とかオイルとか、そんなも

のがないのですね。ただ送りっぱなしで、野積みされるわけですよ。また、難民キャンプに入っても、それは野積みされていて。いろいろな食糧が着いているわけですけども、そこから先のことについてどのように手当てをするかとか、ということまで及ばないというのが現実ですね。

高山 送って満足してしまうところがある。それは、やらないよりは、何かその気持ちをつなぐという意味ではとてもいいことだと思うのですけれども、もう一步、本当に国際協力というものを有効にしていくためには、それが援助を受ける側の人たちの手元に届くまでをじっくり見る人が一人でもいてほしいなと思いますね。

碓井 そうですね。いくらその輪を広げても、例えば、車ならパーツがないとか、井戸でも、あるいは心電計でも、救急車でも、壊れてしまえばもうそれが使えなくなっている。だから、部品の補給も必要ですし、修理の技術といますか、そんなものも教えないと、本当の意味のボランティアにはならないし、効果がないわけですよ。

アプロプリエートテクノロジー

高山 私たち国際協力の分野で活動している人間というのは、よく先進国型援助を戒めて言うのに、アプロプリエートテクノロジー（適正な技術）というのがありまして、すべてが適切であるか、ハイテクノロジーであればいいものというわけではない。大が小を兼ねるというわけでもなく、アプロプリエートなるものが必要である。

例えば、今、先生がおっしゃったアフリカの飢餓のときも、ある国からたくさん粉ミルクが送られたのです。飢餓の子どもたちがミルクがなくて死んでいるのだったら粉ミル

クを送ろうとって送られたのですけれども、実際は、それによって多くの子どもたちが死んだことが知られています。なぜかというと、その粉ミルクを溶かすための水が不十分で、汚い泥水でといて赤ん坊に飲ませるわけですね。そうすると、急性下痢症を起こしてしまい、脱水で亡くなってしまいます。これも、粉ミルクというものの自体はハイテクノロジーだったけれども、アプロプリエートではなかった。

碓井 そういう意味では、衛生教育とか、公衆衛生とか、そういうことから始めないといけないし、それを幼児のときから始めるには鉛筆が要るとかノートが要るとか、本当に何年たっても前にいきそうにないような膨大な問題があるのです。

高山 そういう問題に直面していくのが国際協力だなと思います。

碓井 私はテレビをあまり見ないのですが、先生の仕事は、テレビでもしょっちゅうやっていますか。

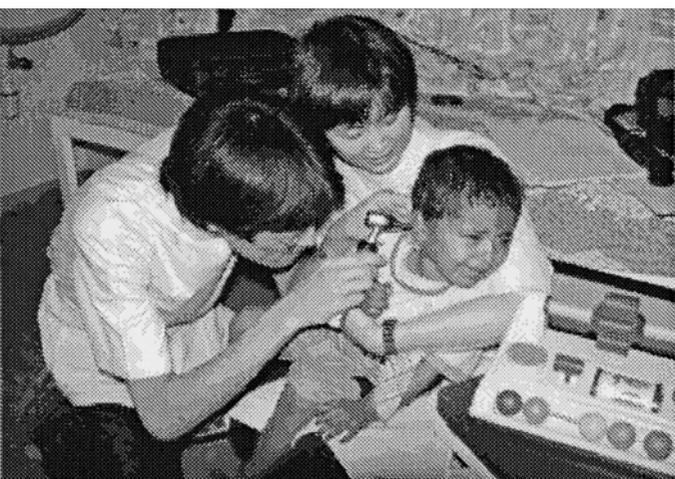
高山 いいえ、そんなことはありません。私のやっていることというのは、実際のところ、国際協力というより何かを体験して日本に伝えるということだと思っています。

碓井 10月4日、5日、京都で開かれた第4回 IPPNW北アジア地域会議でのビデオはすばらしかったですね。先生は、映画監督的なセンスもおありですね。

高山 ありがとうございます。とにかく、現地の状況を伝えることが仕事だと思っていますので、映像であれ文章であれ、プレゼンテーションにはかなり力を入れています。

ネパール、チベットへ —アジアを横断する日本の 学生は毎年2,000人—

碓井 もう少し旅の話聞かせていただこうかと思いますが、インドからネパールに行か



ネパールの小児病院で診察中の高山先生(左)。
この病院は日本からの民間支援で運営されている。

れたのですね。その次はチベットですね。私などが思っているのは、秘境とか難路とか、ロバが重い荷物を持って行くというところもあるみたいですが、意外と道路もあつたりするのではないかと思います。実際にはどうなのですか。子どもの教育とかは。

高山 やはりネパールからチベットへと抜ける道は秘境と言ってもおかしくない地域で、政治的にも不安定ということもありますし、厳しい道のりの旅でした。ただおもしろいのは、どこに行っても日本人がいるのですよ。日本人は本当に世界中にいますね。学生時代にこれだけ世界を旅するのは、恐らくユダヤ人と日本人だけではないかと思えます。

イスラエル人にはよく旅先で出会うのですが、彼らは、大学に入る前に兵役があって、兵役が終わってから大学に入るまでの半年間は、海外を旅するというのが一種の通過儀礼のようになっています。

一方、日本の学生はアルバイトなどで、諸外国と比較すればかなりの収入がありますから、積極的に海外旅行をしていますね。それに、島国根性の裏返しとして、外を知っておかなければならないというプレッシャーも、他の先進国と比して強いような印象がありま

す。そんなわけで、毎年、アジアを横断する日本の学生は2,000人ぐらいいるということですよ。

日本というのはこれからいろいろな限界を感じていこうし、世界も限界を感じている。そういう中での体験というのは、アジアに私はちらばっていると思うのです。そこに生き抜く知恵というものがあるはずですよ。そういうものをもっと民族的予感のように、日本の若者たちはアジアに旅立っているのではないかと感じています。それは、例えば、古代日本が律令国家をつくる時に、日本の若者たちが中国を目指して旅立っていったように、あるいは、明治維新の時代にこれから西洋化していく国際社会の中に入って行くというときには、ひとつのスタンダードとしてのヨーロッパを目指して、維新の若者たちが行ったように、これからの日本の時代のひとつの解答というものはアジアにあるというのを民族的に感じているのではないかと思います。

碓井 鑑真だとか栄西だとか道元だとか、そういう人たちは、非常に命がけで旅をしましたね。宋、唐とか、その当時は遠いですから、しかも、膨大な勉強をして帰ってきて、本当にすごいなと思いますが。今も、その気持ちは日本人の若者にはある。

高山 鑑真とは比較にはなりません。

碓井 でも、そんな流れが少しでも残っているだけでも私はうれしいと思いますよ。日本人は、だめになっていくのではないかという気もしたり、例えば、イラク派兵についても賛成の人が8割近くいるというのには驚きますね。最近、反対だという人も5割くらいに増えています。

高山 そうですね。ただ、それには私はちょっと違った考え方を持っておりまして、若者自体がそういう傾向があるというよりも、日本社会の中にいると、若者がそういう行動に



同調してしまうという感じがあると思うのですよね。

逆に、同じ若者であっても、日本の大学で授業を受けているときの顔と、アジアを旅しているときの顔は全然違います。目の輝きが違います。つまり、日本という社会の中に入ると目が死んじゃうんですよ。

実際、私自身も、最初にこういう世界にわかるようになったきっかけというのは、東京大学に入学したのは1991年ですが、これは湾岸戦争が起きたときですね。そしてユーゴスラヴィアの民主化がやられたときですね。そして、カンボジアで言うと、パリ和平合意が出されたときで、非常にアジアもヨーロッパも、世界的に大きなうねりがあったときですよ。

そのときに、大学に入学して、それなりに勉強しに入ったわけですが、夢があり、希望があり、大学に入ってこれから自分の生き方を探さずと思ったら、つまらないドイツ語の講義を聞いて、テスト試験を受けさせたりするわけです。大学に入ったときの夢とか希望というものが、講義が始まるとどんどんつぶされていくみたいな感じがしました。

そういう中で、いや、これじゃだめだ。自分自身の人生を自分で切り開くためには、こういうところにはだめだという思いが非常に強くて、最初は、まずユーゴスラヴィアに行こうとしたのです。というか、東欧に行ってみようと。ベルリンの壁を見に行ったり

とかしました。その次に、カンボジアに行ったのですけれども、そうするうちに、自分自身、現代を生きているというリアリティがだんだん自分の中で芽生えてきて、目的意識が出てきたのです。

風通しのいい社会に向けて

ところが、やっぱり日本の大学に戻ると、目が死んでいく自分に気づくのです。これは、私たち自身が変わっていかなければならないことだと思います。よく大学であるとか、大学病院でもいいのですけれども、問題というものをすぐお上のせいにしたり、あるいは、大学の教官のせいにしちまうけれども、そうではなくて、私自身も変えていくための責任があると思います。

だけれども、いずれにせよ、現状としてはどうかと言うと、目が死んでしまうシステム、そういう中で、例えば、今、小泉さんがやっていること、いいことも悪いこともあります。そういうことについても無関心になってしまうシステムになっているのではないかと思うのです。

碓井 今、何をやっても、ほとんどの若者が、それは反対だとかは言わない。ノーと言えない日本人というか、何でも容認、あるいは黙認、無視、無関心ですけれども、どうしたら良くなりますか。

高山 いろいろな方法があると思いますけれども、私がひとつ提案したいのは、やはり若いうちにアジアを旅してほしいと思うのです。そこで、現代のリアリティというものを体験して、「あ、こういう時代を生きているのだ」という実感が持てると思うのですよ。そして、日本に帰ってくる。そこで、ひとつの勝負があると思うのです。国際ボランティアというのは、海外でどんなに活動してもや

はり日本人であるわけですから、最終的には日本人としていかに生きるかというところが問われていると思うのです。

日本に帰ってきて、国際ボランティアをした経験を日本でどのように再構築していくのか、そこが勝負なのですね。

碓井 私も1997年にロシアの非核化キャンペーンに行ったことがあります。ソ連が崩壊し、15の国に分かれて、特に、ロシアとカザフとウクライナと、ベラルーシの4つの国に核が分散されて、とても危険な状態があったのです。核の管理の問題、盗まれたり、横流ししたり、そういう問題があったときに、7人ぐらいで一緒に旅をして、核の管理のずさんさを見たり、西洋人だとかアメリカ人だとか、ロシア人に核の拡散防止、核の廃棄の話をしました。それは後にとても自分に勇気を与えるものになりましたね。見たこと以上に、自分にはやっぱり何かしなくちゃいけないとか、何かできるんだというような自信というか、勇気がわいてきましたね。

高山 煮詰まって閉塞した社会を再び活性化させるには、閉じている外界への窓を開き、内部に新鮮な風を送り込む必要があります。国際ボランティアとは、風通しのいい社会への一助になると信じています。

現地の伝統的治療師は 重要なパートナー

碓井 ところで、高山さんは国際ボランティアとして活動されている途中で、病気とか、トラブルに巻き込まれたことはないですか。例えば、カードをなくしたりとか、そんなことはなかったのですか。

高山 幸い金銭のトラブルに巻き込まれたことはありません。ただ、一番、肝を冷やしたのは、1994年にカンボジア農村で調査をして



いるときにポルポト派の襲撃があって、銃撃戦に巻き込まれたときのことですね。このときは非常に緊迫した状態になりましたけれども、あるおばあさんの家のベッドの下に隠れて事なきを得ましたが。

病気は、もともと体は丈夫なほうではないので、いろいろやりましたね。一番つらかったのは、ヨルダンで激しい下痢に襲われたときのことです。あれは1999年のことでしたが、ヨルダン訪問は3回目だったので、少々なめてかかって油断していたのです。それまでの経験から安全に生水が飲めていたので、このときも私は生水を飲んでいました。しかし、その年に限ってヨルダンは湯水で、シリアから水を輸入したのです。シリアの水は汚いので、みんな沸かして飲んでいたらしいのです。ところが私はそのことを知らないで生水を飲んでいました。ある日突然、赤痢様の状態になって、宿のトイレで倒れてしまいました。おそらく2時間ぐらい経過した頃、意識が戻りましたが、朦朧としていて、体温を測ると、39度の熱がありました。

それから現地の病院に這うように行って入院したのです。その夜、生まれて初めて恐慌状態を体験しました。さびしさのあまり、体が痙攣して、暴れだしそうになったのです。頭を殴ったり、本を壁に投げつけたり、ありとあらゆる代償行動をして、人に見せられる状態にまで自分を引き戻してから、ナースコー

ルをしました。来てくれたのは男性の看護師でした。涙声で、自分がナーバスになっていること、この箱のような病室が耐えられないこと、なにより日本語を話したいこと、それらを訴えました。最後に、「向精神薬をくれ」と言ったら、「OK、でも散歩も悪くないぞ」って気軽に調子で応じたんです。それで私たちは、屋上に行ってみることにしました。歩きながら、彼はほどよいリズムで話しかけてくれました。屋上に着くと、彼は私の本を持ってきていて、井上 靖でしたが、「これを声を出して読めよ。聞いててやるから」と言ったのです。しかたなく、彼にそのまま日本語で読んで聞かせていたら、だんだん気持ちが落ち着いてきました。不思議な体験でした。病室に戻りながら「あの話どうだったかな?」と聞いたら、「まあまあだね」と彼はジョークを言って、2人で笑って、そして、部屋に戻って、それから落ち着いて寝たのです。

碓井 いい看護師ですね。

高山 すばらしい看護師でしたね。

碓井 旅先でそういう病気になると、とてもつらいですね。

高山 とにかく、医療がないようなところで病気になると、本当にお医者さんって、手前みそですけども、大事な仕事だなと思いますね。医師がいなくて、伝統的治療師を頼って行ったこともあります。カンボジアには今でも伝統的治療師が各村で重要な役割を果たしています。バリーという神の息吹を吹きかけることで、病を癒すのです。旅先で病に倒れるときは、こういう人にでも腹をくくって頼らねばならないときがありますね。非常におもしろかったのは、怪我をしたとき、天井のクモの巣を丸めて傷口にすり込むのですね。先生、ご存じですか。

碓井 知らなかったです。

高山 それは危険ではないかと訝って、日本に帰ってきて、文献を幾つか調べてみたこと

があります。驚いたことに、このクモの巣治療は結構世界的にあるのです。そして、科学的な根拠も知られています。クモの巣というのはタンパク質できていて、表面が抗菌剤でコーティングされているそうなのです。というのは、タンパク質がそのまま露出した状態で風に揺れるとすぐ菌が付いてしまって、切れてしまいますね。ところが、あれは切れずに、それこそ何年でも埃がついた状態でも風に揺られていますね。つまり、カビや細菌が増殖して腐敗しないわけです。ですから、その地域でけがをして、化膿しないようにする手っ取り早い方法は、その地域のクモの巣を傷口にすり込むことなのかもしれません。伝統的治療を軽視しているとなかなか見えてこないものがありますが、彼らと一緒にいると、それが見えてくるが多かったですね。

碓井 そういう祈祷師(ウィッチクラフト)といますか、医師ではないけれども、呪術師のような、そういう人は結構いるのですか。

高山 それはもう多いです。むしろ、国際保健医療協力の分野では、彼らと良好なパートナーシップを築いてゆくのは重要なことです。彼らは、西洋医学の知識は確かにないですけども、公衆衛生の知識は非常に高いです。たとえば、どういう水がいけないとかよく知っています。また、どこで何が流行するということを予測する力、非常に強いものを持っていますから、彼らとのつき合いは非常にエキサイティングですね。

伝承の中に意外と真実が

碓井 私は、ごく最近ですが、楽しい経験をしているのですよ。というのは、中国に行ったとき、上海である人から、弥生時代の末期、秦の始皇帝の時代に、不老長寿の薬草を求め

て徐福が日本に来たことを教えてもらったのです。私は日本に帰ってきていろいろ勉強しまして、和歌山県の新宮市よりもちょっと西になりますけれども、熊野に行ったのですよ。それで、91歳のお年寄りに会っている話話を聞いたら、「これが徐福が探しにきた薬草です、お茶ですよ」と言うので、それを飲んでみると苦かったのですよ。その薬草を20本譲り受けて広島で植えたんですね。それが根付きましたので、さらに注文を出して600本を買って植えて、夏は枯れないようにスプリンクラーを取り付けたり、鶏糞をまいたりしました。

そうやってお茶ができましたので、そのお茶を飲んだり、どのくらいの割合で番茶とまぜたら飲みやすいとか、幼児とかお年寄りが飲んでもいいように研究して、一昨年の春から天台茶を開発して、天台烏薬と名前も付けたんです。そうしたところ前の週の日曜日(2003年10月19日)に、天台烏茶の木、天台烏薬のことが朝日新聞の一面に出たのですよ。岐阜大学の研究で天台烏薬を肺癌の細胞に投与したら、癌の増殖を抑えたというマウスの実験結果が。とたんに引き合いが多くなってうれしい悲鳴なんです。2,000年ぐらい前の話を誰も実行していない。

他にもこんな話があるのです。毛利元就の死因を調べたことがあるのですよ。『毛利元就考』を執筆しているときに、毛利一族の武将の死因を調べたら、毛利元就が食道癌で亡くなったという死因を出すことができたのです。その後、広島で開催された食道癌の学会でも話題にいただきました。大正時代に3日間、毛利元就を研究するというセミナーが吉田町であったのですが、そのときも手つかずで、死因を誰も追究しないでした。結構古い話に、今のクモの巣の話のようにずっと言い伝えられている中に、本当の真実というものもあるのですね。我々は新しい話をして

いるのですけれども。

高山 確かに理由なく語り継がれていることはないですからね。伝統医療とは、長い歴史の試行錯誤で熟成された、究極の癒しのテクニクだと言うと感傷的になりますが、国際協力の視点から現実に戻すと、やはり、治癒を最優先に考えた場合、やはり現代医学こそが有効であることを、感傷でかき消すべきではないとも思います。これからの国際協力では、伝統医療を、すでに地域住民に文化として受け入れられているシステムとして尊敬し、私たちが得意とする現代医学をもって手を取り合い、地域の健康問題に対応してゆくことではないでしょうか。こういう姿勢で医療の近代化が図れば、一番バランスのとれた健康な社会が作られていくのではないかと思います。

碓井 先生は何か次の模索をしていらっしゃるんですか。

高山 当面は内科医としての研修に集中したいと思っています。これまではアマチュアとしての国際協力活動でしたが、いつかまた、今度はスペシャリストとして貢献する機会があればと希望しています。

碓井 高山先生のような人が日本医師会長に立候補してくれたら助かるなと思います。社会の医師会を見る目が変わるのではないかと思います。どんどん医師会にも若い人が入ってくれたら、医師会ももっと盛り上がるのではないかと思います。医師会にもご理解を示していただきまして、これからもお元気で、ますますご活躍されるよう祈っています。

高山 ありがとうございます。また、先生と世界のどこかでお会いできることを楽しみにしています。

碓井 今日は本当にどうもありがとうございました。

高山 ありがとうございました。